

# 印象新聞

Indian Elephant  
第6号  
読者に



## 劇団印象、 『国家と芸術家』シリーズ。 次回作は... ジョージオウエル

46歳で早世したジョージオウエルの人生の内、BBC(英国放送協会)に勤務し、インド向けラジオ番組を作っていた1940~1945年を取り上げる。当時のイギリス政府の対インド政策と、彼はどのように対立し、敗北したのか? その敗北において、どのように彼の代表作『動物農場』(1984)が生まれたのか? を描く評伝書!!

2022年  
6月8日(水)~6月12日(日)  
@馬車前劇場(下北沢)

## ベニング・イングリッシュ

「言葉の自由の光と影」



オーウェルの小説『1984』の中に、『ニュースピーク』という架空の言語が存在する。国民の語彙や思考を制限し、国家のイデオロギーに反する思想を考へられないようにするために作られた言語であるが、これは『ヒ・ホ・オグ』が提唱した『ベニング・イングリッシュ』というものから着想を得ているのではないかと語られている。『ベニング・イングリッシュ』とは英語の簡略化運動であり、ハロ語の語彙だけをすべてのコミュニケーションが可能になるという説である。オーウェルは当初、この説に興味をもち、評価していた。しかし、言語の簡略化は、便利であると同時に、言語の自由を奪う可能性を孕んでいる。オーウェルはBBCの仕事の中で自ら模索し、可能な限り推進された流れから、それに気づき、『ニュースピーク』を生み出したのではない。しかし、面白いのは『ベニング・イングリッシュ』は、まだ廢れていない。外国語として勉強するにはやはり便利な考え方があろう。言語の自由はどこまで毛脆く奪ってしまつた方が傷つくことが少なくなつて、それはそれで幸せなのかもしれない。自由な言葉の世界の中に生きていきたい。

## 『1984』とア小説の最高傑作『1984』を読んで

1984年、イギリスの小説家ジョージ・オーウェルによって書かれた『1984』は、無言のうちに、架空の全体主義国家『オセアニア』。独裁者ビッグブラザーによって支配された世界で、全人口の約2%のエリート達が権力を握る為に、それ以外の一般市民は『監視』されて、自由に行動することも思考することも許されていない。しかし、党の巧みなり方により洗脳され、ビッグブラザーを熱狂的に愛し崇拝している。主人公ウィンストン・スミスは真理省と呼ばれる役所で、毎日歴史の改竄作業をしている下級彼人だ。党員でありながら、密かにビッグブラザーに対し違和感を感じ、物語はそんなウィンストンが日記(それも本来は、な行為として)を書くところから始まる。印象深いのは、『1984』と呼ばれる労働者の人々の存在だ。彼らは人口の5%もあを合わせれば社会をひっくり返せるだけの持っていたが、皆貧しく、日々生きていくのに精社会を成るどころか、奪取されている事に気がついてドモした。身近なところで想像して見た。例えば私は劇団のやり方が間違っていると感じた時、戦術術も、日本の演劇人として、日本の演劇界のやり方がどんな間違っているかを真剣に考えたことがあったらう。自分の生きる社会について考えるべきだ。この作品を結核を患った体で、文字通り命を削って執筆した。なぜ、そうまでしてこの作品を書いたのかは、是非印象の6月の本公演でご覧いただきたい。もちろん私、鈴木アツトも、印象のビッグブラザー鈴木アツトによって模範されるので、無事に掲載出来るかはわかりません。いや、もちろん私、鈴木アツトも、絶賛している。



1984年の世界

『1984』に出ている「ビッグブラザー!!」とは、一般市民が持っている言葉と、党の悪い恩恵は、党の都合の良いように出される政策。

現代で言うなら、SNSの「いいね♡」って少し似てたり!? そのボタンが無限思考が終わりか?

自信が無いのだから、おすればあんな涙

劇団印象が2022年85読者会を開催!! 参加してはいい本を絶賛!! Twitterをフォロー!!